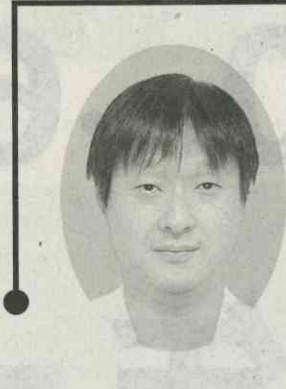


放射線科が診断で用いるCT、X線透視、超音波などの画像を頼りに、細長い管（カテーテル）や針といった医療器具を使用して行う治療の総称を「IVR」（インターベンショナル・ラジオロジー）と言います。日本語では「画像下治療」です。最大の長所は、体を大きく切ったり開けたりせずに体内の病変を治療することが可



徳島大学病院放射線診断科

岩本 誠司 副科長

能で、患者さんの体への負担が非常に少ないことにあります。今回は当科が施行しているIVRの中で、件数の多いものや最新のものをいくつかご紹介いたします。

がんは、大きくなるために動脈から栄養を受けています。がん治療で用いる「動注化学療法」は映し出した画像を頼りに、カテーテルでがんの近くまで動脈をたどり、抗がん剤を直接注入します。内服や点滴に比べ、非常に高濃度の抗がん剤を届けることができ、少ない量の薬で高い効果が期待できます。

さらに「動脈塞栓術」は、がんの栄養となる動脈だけにカテー

ルから詰め物を注入し、血流を遮断して「兵糧攻め」にします。肝臓がんや他のがんの肝転移などに高い効果を発揮します。また、この方法はがん以外に外傷、出産、術後などの出血に対しても迅速に止血できる方法として、緊急的に行うこともあります。

新しい点滴システム「静脈ポート留置」は、点滴での栄養補給や抗がん剤の投与が長期にわたり簡単に行えます。心臓の近くの太い静脈に留置したカテーテルと、皮下に埋め込んだポート（10円玉程度の大きさの円盤型器具）を連結させる方法です。日常の行動がほぼ制限されないのが長所です。

体への負担が少ないIVR

今年から当院でも四国で2施設目として開始した最新のがん治療法が「凍結療法」です。皮膚から太さ1・5ミリの程度の針を刺し、がんに命中させます。針先が超低温になり、がん細胞を凍結して破壊します。治療中の痛みが少ないのが特徴です。これまでに治療した患者さんは1回の治療でがんが消失しています。現時点で保険適応は小型の腎がんのみですが、将来的に肺がん、乳がん、肝がんなどへの拡大が期待されています。

今回ご紹介した以外にもさまざまなIVRがあります。いずれも患者さんの健康を守る、あるいは取り戻すことに貢献できますので、ぜひ多くの方々に知っていただきたいです。